

# 高齢者衣服の現状と課題

On the Issue of Current Clothing of the Elderly

赤 根 由 利 子  
Yuriko AKANE

## 1. はじめに

日本の高齢社会は極めて急速に進展し、65歳以上の高齢者が総人口に占める高齢化率は約20%と高い水準で、現在も進行中であり、この傾向はまだまだ続き、超高齢化した高齢社会に入ると推測されている。平均寿命も急速に進展し、2005(平成17)年には男性78.53歳、女性85.49歳になり、後期高齢者が急速に増えている。同時に健康寿命も延びて、健康状態を75歳以上でも一括りにすることは難しい時代となっている。

このような高齢社会にあっては、活力ある社会の実現のために、高齢者の就労や生き生きとした社会参加活動が重要となり、高齢者の衣服においても、それらの生活を支えるために、ただ着ているだけの服から、装う楽しみを見出せる服という視点が大切であると考えられる。これまで一般に、高齢者の服装は地味で目立たず、いい年をしておしゃれでもないなど、ネガティブなイメージで捉えられていたためか、若者を中心とした商品展開が中心であり、現在でもなかなか高齢者の満足が得られるサイズやデザインの衣服が少なく、機能的で装うことが楽しめる気に入った衣服を探し出すことは容易でないというのが現状である。

近年、被服学領域において、高齢者衣服の研究も、介護素材や身体機能の変化と被服設計に関する研究などなされてきているが、「装う」ことに対してどのような意識を持っているかについては、高齢者の意識を正確に把握することが難しいなどからあまりなされていないのが実情である。

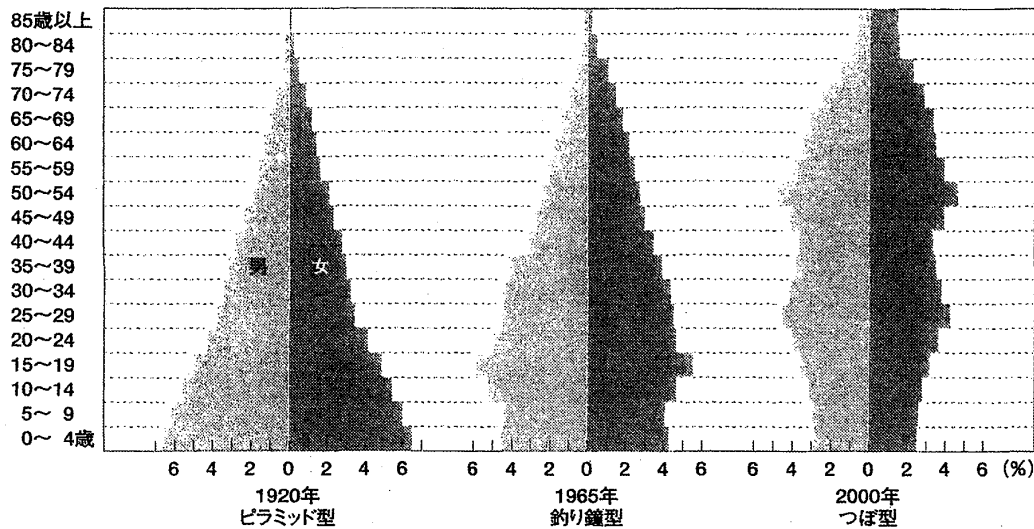
本報では、まず人口高齢化による実情と高齢者の衣生活について述べ、ついで、「装う」ことに対するアンケート調査から「装う」ことの意識を探り、それらを通して高齢者衣服の課題について考察する。

## 2. 高齢者の増加

平成7年に制定された高齢社会対策基本法は「我が国の人口構造の高齢化は極めて急速に進んでおり、遠からず世界に例を見ない水準の高齢社会が到来するものと見込まれている」と前文で述べており、法律として初めて「高齢社会」の用語を使用したものである。また、高齢社会対策については同法第1条において「高齢化の進展に適切に対処するための施策」と定義され、基本理念として以下3つのことが盛り込まれている。

- ・国民が生涯にわたって就業その他の多様な社会的活動に参加する機会が確保される公正で活力ある社会
- ・国民が生涯にわたって社会を構成する重要な一員として尊重され、地域社会が自立と連帯の精神に立脚して形成される社会
- ・国民が生涯にわたって健やかで充実した生活を営むことができる豊かな社会

一方、高齢者の増加と相反し、急速な少子化が進行しており、図2-1を見ても明らかなように我が国はいよいよ人口減少社会を迎えることになるが、これは日本だけの問題ではなく世界的



資料：総務省統計局「国勢調査報告」

図2-1 日本の人口ピラミッドの変容

な傾向と言えよう。人類は今までに経験したことのない高齢社会を迎えるのである。

退職年齢を定めた定年制が日本に普及したのは、工業化が進みサラリーマンが増えた大正時代からである。その頃の定年は50～55歳で、1986(昭和61)年に「60歳定年」が法制化されたのであるが、その後1994(平成6)年の高年齢者雇用安定法の改正や、2004(平成16)年の改正を経て2013(平成25)年までに「定年は65歳以上」とすることが義務化された。

定年の延長に伴い従来とは異なった様々な分野で活躍する高齢者像が描かれ、今までとは違った高齢者観が作られ、高齢者を対象として市場も開拓されるだろう。

図2-2と図2-3はシルバー人材センターの年度別推移と加入会員の年度別推移であるが、1980(昭和55)年度末の団体数は92団体、会員数は4万6448人であったが、次第に増加し2004(平成16)年度末には1820団体、77万2197人と20倍近くまでの躍進ぶりである。そのほか、ボランティア等で海外協力隊に参加したり、図2-4、2-5から見てとれるように元気な活力ある高齢者は増加する傾向にあるといえる。

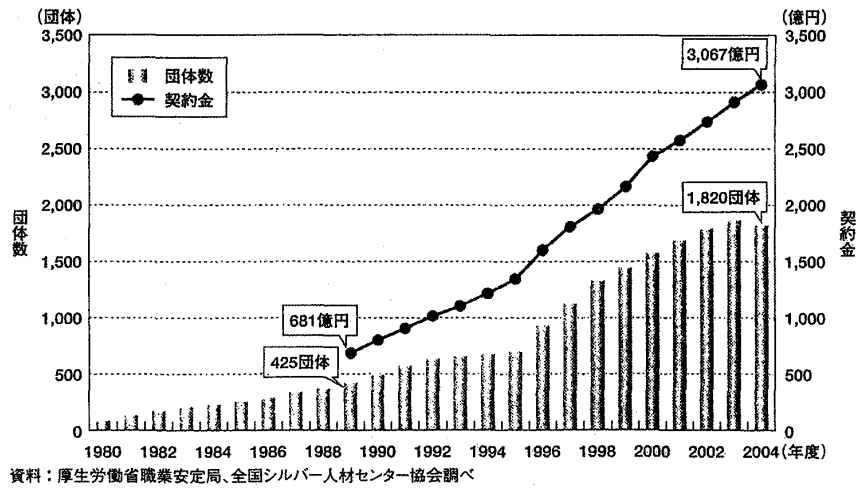


図 2-2 シルバー人材センターの年度別推移

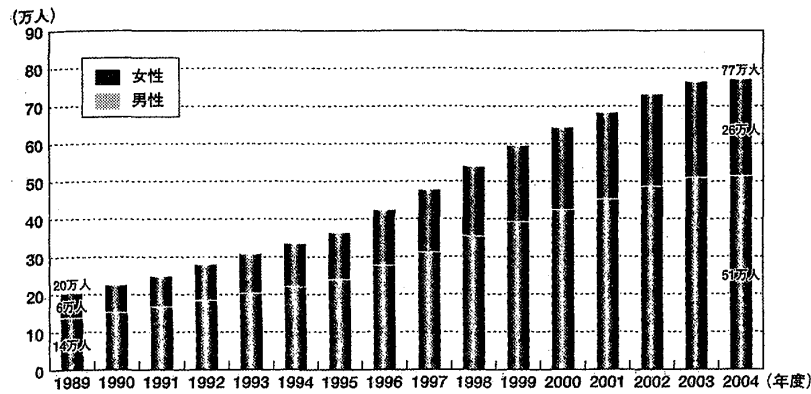


図 2-3 シルバー人材センター加入会員の年度別推移

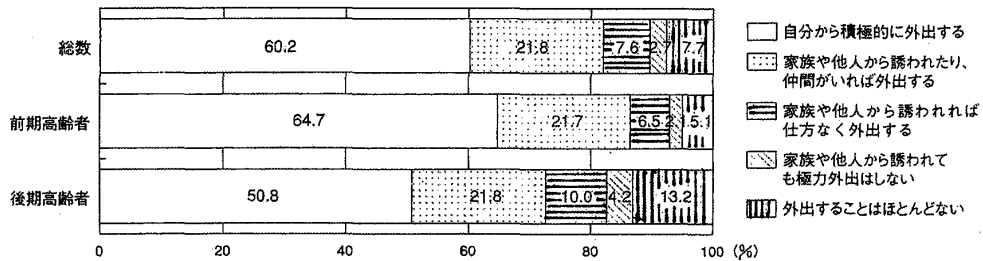
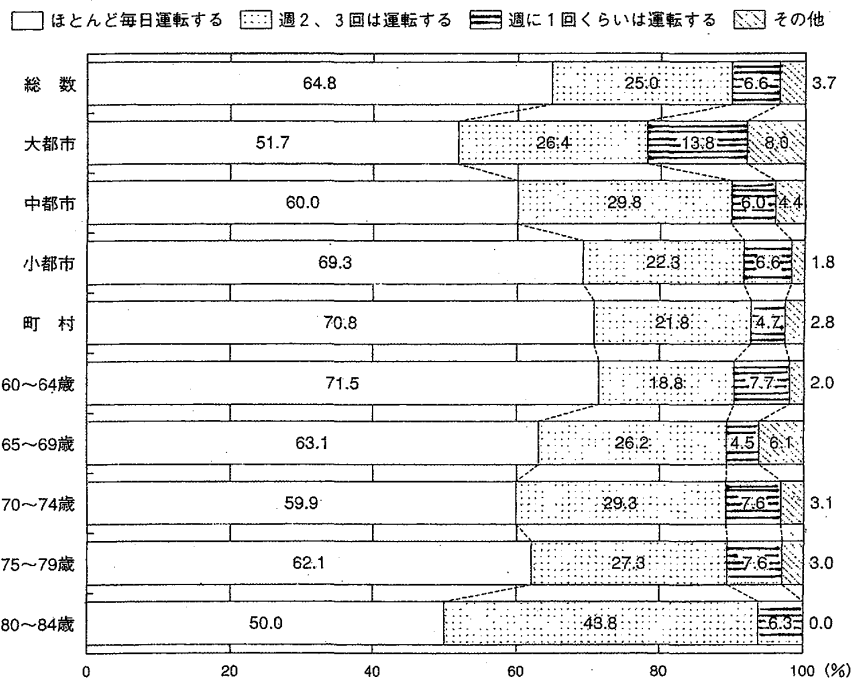


図 2-4 高齢者の外出状況



資料：内閣府「高齢者の住宅と生活環境に関する意識調査」(平成13年)  
 (注1)調査対象は、全国の60歳以上の男女  
 (注2)大都市とは東京都区部と指定都市、中都市とは人口10万以上の市(大都市を除く)、小都市とは人口10万未満の市  
 (注3)その他は、「月に数回しか運転しない」、「年に数回しか運転しない」及び「無回答」の計

図2-5 自分で自動車を運転する高齢者の運転頻度

### 3. 高齢者の衣生活について

生活は「衣食住」と言われてきたように、衣生活は人間が動物やその他と根本的に異なる点において第一のものであり、また人生の生活の質(QOL)に密接に関与しているものである。衣服には、保健衛生的機能や社会性の保持機能、および生活の場への適応機能などがあるが、さらにその人の個性(人格)や生活態度(生きざま)を如実に表すものである。加齢や疾患などにより体が不自由になってくると、それまで当たり前のように行ってきた日常生活動作がなかなか難しくなるが、着ていて快適な装いができる衣生活でなければならない。しかし実際には、高齢者の着ている衣服は、全体的に地味でデザイン性も乏しくあまり個性のない場合が多い。高齢者用衣服を購入する時、どこに行ったらあるのか、まず売場が見当たらないのである。やむを得ず、40代～5、60代対象の中から選ぶようになる。40代、50代向けのままでは、70代、80代には不適當な部分が出てくるのは当然である。高齢者が5人に1人という時代が到来しているのに、高齢者向きの衣服はあまり作られていないのが実情といえる。

高齢者用衣服に必要な要件としては①着脱がしやすい、②着て楽である、③温度調節を手軽にできる、④素材への配慮、⑤安全である、⑥生活動作において便利である、⑦欠点が目立たない配慮、⑧明るく楽しい雰囲気、⑨残存する能力が生かされることなどが考えられる。

近年、高齢者用ボディもあいつぎ開発され、高齢者配慮設計指針—衣料品 JISS0023(2002年)も

発表され、身体形態への適合に対する対応がなされてきている。また、着脱のしやすさや留め具の扱いやすさなど、高齢者の身体機能に適応した衣服の研究もなされている。高齢者の体型は個人差が大きく、類型化は容易ではない。しかし高齢者が生き生きとした豊かな衣生活を過ごすためには、高齢者のサイズやシルエットに適合でき、身体機能にも適応した着やすく、安全でファッション性のある高齢者向けの衣服が必要となり、それらへの対策を講じなければならないと思う。そのためにも、高齢者の衣服への要望や評価を知り、高齢者が扱いやすく満足できるいろいろな工夫を衣服に取り入れていくことが大切である。

#### 4. 装うことに対する意識の変化

広辞苑によれば、「装う」とは、①したくをする・準備をする、②飾りととのえること、③ふりをする、という意味がある。

一方、「御洒落」とは、《身なりや化粧を気のきいたものにしようとしてつとめること。またそうする人》という意味合いがあり、洒落（しゃれ）だけに関して言えば、こんな言葉も出てきている。

しゃれ（洒落）	①気のきいたさま、いきなこと ②気のきいた身なりをすること、おしゃれ
しゃれもの（洒落者）	①気のきいたことをする人、風流者 ②はでに着飾る人 ③こっけいなことをする人
しゃれおんな（洒落女）	①華美な装いをする女 ②江戸時代、風呂屋にいて客を相手とする遊女・売女

「装う」とは大分意味合いが異なるのがわかる。

若者は「おしゃれ」というと、プラスのイメージを持ち、「オッシュャレー」というのは個性的なもの・人と違ったことをする人に対する称賛の意味合いが込められているが、高齢者にとっては、マイナスのイメージがあるようなのは、上記の、しゃれもの＝はでに着飾る人、しゃれおんな＝華美な女・遊女・売女の意味にとられるため、あまりほめられたとは思わず、別のほめ方を期待している感がある。では、高齢者は、どんな思いを持って装っているのだろうか。装うことに対してどう思っているのだろうか。「装う」とは《おしゃれ》とは、単に身にまとっているもの、外見のみをいうのではなく、その人の生きざま・生活意識・心そのものが自ずと出てくるものだから意識を探るのは容易ではない。

調査方法として、2006年11月に、M市の施設で面接による聞き取り調査で行った。対象は、①デイサービス利用者と②施設入所者で、①デイサービス利用者は、年齢60歳～92歳の男女18名、

②施設入所者は、年齢65歳以上の男女12名からのものである。図4-1から図4-7は今回の調査の集計をグラフ化したものである。

図4-1「毎日気に入った衣服を着たいか」という問いに、86.7%が「はい」と答えた。そう答えた87歳の男性に「今、着ている衣服は好みか?」と尋ねたところ「いいえ。色、デザインが嫌い」と答えた。少し不機嫌そうに椅子に腰かけている彼に、本人の望むような清潔そうで着やすい衣服が提供できたら、笑顔を見せてくれるだろう。今着ているものは、汚れが目立たない、濃いグレーの上下の同じブカブカのスウェットスーツだった。

図4-2のアンケート中、着やすいものというのは、ほぼ全員が着たいと答えているのであるが、よく聞いてみると、着脱が楽なことと、着ていて楽なことと、両方の意味合いがあるようだ。着脱が楽なこととしては、前開きのもの、袖つけを大きく、あまり手を使わないで着られるもの、脇や股下を開いてファスナーになっているもの等、具体的にあげている人が多くいて、着るものに対する関心の深さを感じさせられた。あまり売られていないと言う。

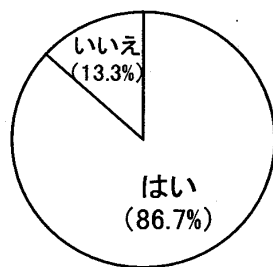


図4-1 毎日気に入った衣服を着たいか

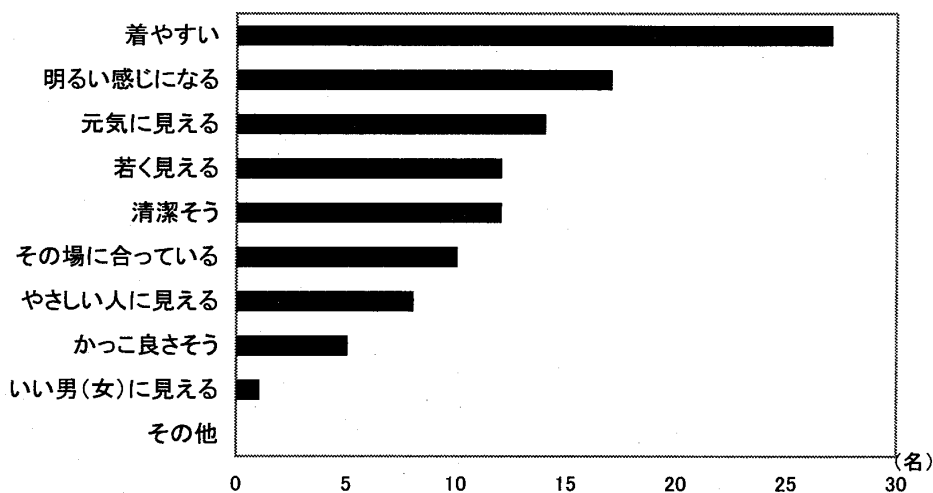


図4-2 どんな衣服を着たいか

「その場に合っているか」という規範意識については、中高年になるほど高くなると言われている。しかし、図4-2で見る限り、さほど規範意識は高いとは言いがたい。一般に、おしゃれ意識の高い人は、低い人より規範意識は低いので、この場合、おしゃれをしたいと思っている人が多い集団だったと見るべきだろうか。そう考えると、アンケート実施直前、無彩色の集団と思えた方々が、明るく色づいて見えるような気がした。

まわりの7、80歳代の男性とにこやかに談笑している92歳の女性は、とてもおしゃれな人だった。清潔感ただよふ感じで、むしろ、気に入った衣服を着、着るものによって気分が変わると答えている。どんな衣服が着たいかという問いには、8つ（着やすい、若く見える、清潔そう、その場に合っている、明るい感じになる、元気に見える、やさしい人に見える、かっこ良さそう）も選んで○をつけ、「なんたって、よく見てもらいたいからおしゃれをしているのよ。よく見てもらいたいと思わない人はいないんじゃないの」と言った。とすると、高齢者でもよく見てもらいたい気持ちがあるのかなどと思うのは、大変失礼なことなのである。

65歳の男性が、気に入ったものがあったら着たいと小さな声で言った姿が忘れられない。

上記92歳の女性が「気に入った衣服を着ているの」と言う通り、彼女は赤いスカーフを巻き、オレンジ系のベストを着ていたが、色白のお顔と銀髪に似合って、とても可愛らしかった。図4-3の73.3%の中の1人に入るわけである。設問に「いいえ」と答えた人は、集団の中にも黙ってすわっていて話の中に入らない人や、離れた所に位置している人でもかたくな感じがした。

聞き取りした限りにおいては、高齢者は、明るい感じになる、元気で若々しく清潔そうな衣服を望んでおり（図4-2より）、図4-4より今着ている服が自分の好みかと問われれば、「はい」と答えているのだから、明るい、元気で若々しい雰囲気を持った方々ということになるが、現実には、その対極の所にあるように思う。一般に、高齢者は社会的規範への同調性が強く、地味で目立たない服装をしがちであると思われていたためか、若者の衣服が、色、柄、デザインともに豊富で、しかも価格が手ごろであるのに比べて、高齢者の衣服は、価格が高く、種類も限られているなど、不満の多いことは指摘されている。本音と建前があるように、本心は、着たい衣服、好みの衣服があるのだが、周囲への思惑や、介護してもらっている家族の都合等で、がまんをして

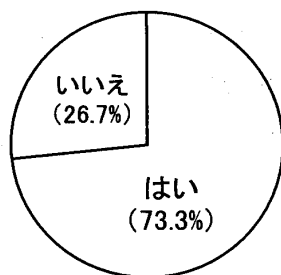


図4-3 着るものによって気分が変わるか



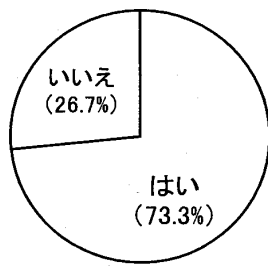


図4-4 今着ている衣服は自分の好みか

いるのが現状で、それがこのアンケートに表われていると見るべきだろう。また、今回、価格の点は深入りせずに実施したが、好みの衣服が着られない理由の一因とも思われる。衣服のアンケートではあるが、実際いろいろお聞きしていると、個々の経済状態が見えてきたり、そこまで入り込むことになってしまい、適当なところでブレーキをかけることも多かった。

図4-6「着たい服がない時どうするか」という問いに、「あるもので間に合わせる」という答えが一番多いのだが、「まわりの人に探してもらおう」「娘に作ってもらおう」と答えた人は生き生きとしてうれしそうだったし、「買ってきてもらったものを着ているのだが気に入らないと言ったら、次は買ってきてくれない」と答えた人は心なしか淋し気だった。介護に関わる人材に恵まれている人とそうでない人との違いをかいま見た思いがした。

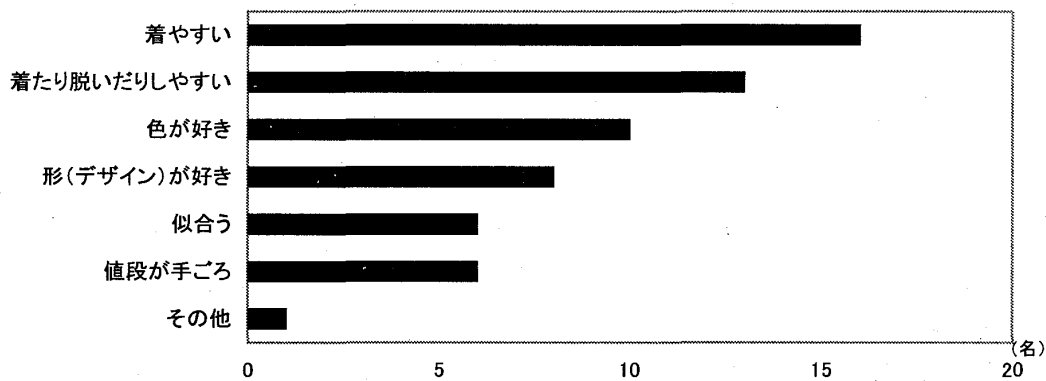


図4-5 好みの衣服を着ている理由

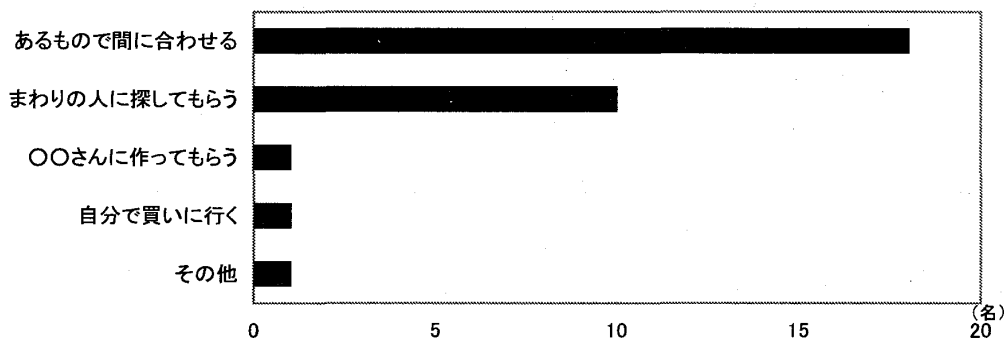


図4-6 着たい衣服がない時どうするか

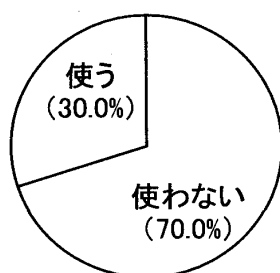


図4-7 若い時の服は使っているか

図4-7の調査より「使わない」との答えが多く予想外だった。古い物を大切に使用しているとされる世代の意識が変わってきていることを実感する。「使わない」の中には「捨てた」もあり、割り切って生活している様子が見えてくる。使っていない理由としては、きつくなった、好みが変わった、似合わなくなった、派手になった等があげられ、古いものは着ないという意識になっている。今と暮らしが違ふとか今の生活に合わない、着にくくなったという答えは、仕事着のことと思われる。元公務員だったと言う70代の男性は、デイサービスでこの施設を利用しているのだが、昔の服がかなり着られると言ひ、元自動車修理を仕事としていた60代の男性は、昔の仕事着の〈つなぎ〉は全部着られないから、着るものが変わったと答えている。若い頃どんな仕事をしていたか、どんな衣生活を送っていたかが高齢になっても関係してくる。

リフォームに関しては、この世代は多いと予想していたので、図4-7の調査結果は意外だった。というわけで設問5-2「手を入れて着た衣服はあるか」という問いにも、ある人は22%なのに対し、ない人の方が多く78%となっている。リフォームしたと答えた22%にしても、ウエストやサイズの調整等で手を入れており、やはり高齢者を支える人手の存在を感じとれる。質問項目にはなかったが、リフォームを含めた補正の必要性は、高齢者の多くが日頃から感じていることで、こちらから質問しないでも、着ている衣服を裏返して、手を入れた箇所を見せてくれたり、きついところを指して、「ここが困る」というジェスチャーをしてくれる人もいた。高齢者の衣服を考える時、一人一人の実態が異なり、その上に障害をもっているとなると、それも考慮しなければならないので、〇〇さんに合った衣服ということになる。アフターケアも含めた、きめの細かい製品づくりが望まれるところである。高齢者にとって、着やすい、おしゃれな衣服が、手ごろな価格で提供されることが必要なことである。

ところで、アンケートを実施して気づいたことのひとつに、施設入所の高齢者とデイサービス利用者との意識の違いが見られ、それは女性においてその傾向が見られた点である。このことは前から感じていたことであり、今回、調査対象人数が少ないので、違いの理由を正確に検証できないが、社会生活がずっと狭められ、外出のチャンスがあまりないせいかもしれない。しかし、「装う」ということに対する思いは強く、図4-2「どんな衣服を着たいか」では「明るい感じになる」「元気に見える」が多く、やはり着るものによって気分が変わり、毎日気に入った衣服を着

たいと答えているのである。装うことに対して意識が変わってきているのを実感した。

現実を見ると、高齢者の衣服は採算が合わないとされ、デパートでも「おばあちゃん・おじいちゃんのコーナー」などとあったのが、いつの間にかなくなってしまった。それは、アンケートに協力していただいた高齢者の方々の声が、着やすいこと（自分にとって）が一番だったことからわかるように、実に一人一人に合わせなければならないからであり、個々の体型に合わせての補正が多いことや、高齢者はいろいろな面で要求度が高いので、十分に納得しないと買わない等、心理的な面もあり、若者の衣服に比して手間がかかるからである。

しかし、何らかの不自由さが出てきてあたり前の高齢者の人々が増加する一方のこれからの時代、高齢者が扱いやすいようないろいろな工夫を、高齢者の衣服に取り入れていくことが、これからの課題である。

今回、高齢者の方々に聞き取りをしたのだが、「このアンケートに答えると、着やすい服を作ってくれるの?」とか、「そういう服を売っている所知っている?」と聞かれたが、小さな背中のお年寄りの姿とその言葉が胸にひびいた。

## 5. おわりに

有史以来の高齢社会を迎え、様々な分野で、ハード面・ソフト面での研究がなされ対処されてきている。しかし、なかなか高齢者の本音が聞こえてこない。本稿は調査を通して高齢者の本音にせまりたいとの思いから実施したものである。なかなか本心をお聞きするのはむずかしかったが、ある程度コミュニケーションをとってからの質問なので、本心が伺えたものと考えている。

調査してわかったことは、高齢者の装うことに対する意識の変化である。規範意識に捉われることなく、明るく元気に見えることを望んでいる。また「どう見られるか」ということに対してもかなり敏感である。反面、着たい衣服がない現実などから、あきらめの境地にいることも見てとれる。高齢者の体型や身体機能に対応した既製服の 패턴の設計やデザイン展開をし、少しの補正で済み、安価に提供できる衣服作りの研究と流通化が望まれる。

平成19年からは、昭和21年以降に生まれた団塊の世代が定年を迎え、高齢社会の仲間入りをする。彼らはビートルズに憧れ、ヒッピースタイルが出現し、個性的で、装うことにこだわりを持っていた、まさに日本の洋服文化とともに育った世代である。戦後のライフスタイルを先陣切って創り上げてきた彼らが、企業戦士の制服であるスーツ脱いだ時、どんな装いを提案してくれるのか楽しみでもある。これからの社会の先導役となる元気な高齢者の出現に期待したい。

また、本調査を通して、介護福祉士養成のための家政学を考えるよい機会ともなった。家政学や家政学実習の授業の中で、介護と衣生活との関わりを教えるのであるが、衣服の装いを媒介にしたコミュニケーションは、誰もが自分のこととして関心を持っていることなので、ほとんどの方がよく答えてくれ、利用者理解につながることである。装うことは人間として生きること

あり、生き生きとした人生を過ごすことでもある。

各人各様に人は自分の人生を送り、その人生がおのずと顔に表われ、身体に表れる。そしてそれを包む衣服は、個性の表現であり、生活態度を如実に反映するものである。即ち顔形を見、服装を見ると、大体その生きざまがうかがえる気がする。衣服は人格と生きざまを表すものと言えよう。高齢者の衣服を考える時、それはとりもなおさず、自分たち高齢者予備軍のこれからの人生を形作っていく器をどう形成するかという問いにもなると考える。今回の調査結果から、高齢者の衣服への思いを知る機会を得たので、今後、更に幅広いデータを集積し、高齢者の要望に少しでも近づけるような衣服を提案していきたい。

### 参考文献

内閣府『平成17年度高齢社会白書』ぎょうせい、2005

内閣府『平成17年度国民生活白書』ぎょうせい、2005

厚生労働省（編）『平成17年度厚生労働白書』ぎょうせい、2005

エイジング総合研究センター編『少子高齢社会の基礎知識』中央法規出版、2006

中川英子編著『介護福祉のための家政学』建帛社、2004

日本ファッション教育振興協会編『ユニバーサルファッション概論』日本ファッション教育振興協会、2002

岡田宣子「高齢者の身体状況と被服に求められる要件の加齢変化」『日本家政学会誌』、56、363～368、2005

岩波君代、渡辺聡子ほか編『装いは自己表現2、3』障害者・高齢者衣服研究交流会、1997、2000

小林茂雄・田中美智編著『介護と衣生活』同文書院、2005

小澤洋子『こんなおしゃれがしたかった』一橋出版、2001

東京都福祉機器総合センター編・発行『衣服リフォーム・オーダー事例集』2000